

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

北半球の競馬はここからが、1年のクライマックスへ向けて盛り上げる季節を迎える。

その一方で、このコラムでも何度も書いているように、英国のブックメーカー各社は既に来季の主要競走の前売りを開始しており、馬券ファンは、目の前の競馬に賭けると同時に、実際に行われるのは何カ月も先というレースの予想にも、いそいそと励んでいる。

今回のこのコラムは、この原稿を書いている22年9月11日の段階で、23年6月3日にエプソムで行われるG1英國ダービーへ向けた「アンティボスト・ベット」長期前売り馬券で大本命に推されている馬をご紹介したい。

各社が8倍から13倍のオッズを掲げ、抜けた1番人気に支持しているのは、このレースを歴代最多となる8度制している、エイダン・オブライエン調教師が管理するオーギュストロダン(牡2)だ。「近代影刻の父」と称される仏国人芸術家に由来する名を与えられているが、本馬が生まれたのは愛国である。

そして、オーギュストロダンの父は、日本産馬だ。誰であろう、19年7月に急逝した「ディープインパクト」がこの世に残した、極めて数が少ないと言われる最終世代の1頭が、オーギュストロダンなのである。

同馬の母は、これも現役時代はエイダ

ン・オブライエンが管理したロードデンドロン(父ガリレオ)だ。この名前をご覧になつただけで、海外競馬マニアの方は「ほほう」と唸られたと思うが、この母も超一线級の競走成績を残した馬だった。デビュートしたのは2歳6月で、2戦目に勝ちあがると、次走はいきなりG2デビュータントS(芝7F)に挑み、ここを制して重賞初制覇を果たしている。

ロードデンドロンはその後、4歳一杯で

引退するまで通算19戦を消化。言うまでもなくシーズンオフはお休みをするが、シーズンに入るとほぼ休みなく走り続けたタフな競走馬だった。しかも、デビュー4戦目にG1モイグレアスタッドS(芝7F)に挑むと、4歳秋のラストレースとなつたG1チャンピオンS(芝9F21-2Y)まで、出走した16戦すべてがG1競走だつたといふのは、鋼の体と鉄の意志を持たなくては、とてもではないがこなせぬローテーションである。

昭和風に言えば「モーレツ社員」のような生活を送りつつ、2歳時にG1ファリーズマイル(芝8F)、3歳時にG1オペラ賞(芝2000m)、4歳時にG1ロッキンギーS(芝8F)に優勝。3歳春にはG1英才1クス(芝12F6Y)に出走して2着となつた「ディープインパクト」がこの世に残した、「1頭が、オーギュストロダン」なのである。

同馬の母は、これも現役時代はエイダ

ン・オブライエンが管理したロードデンドロン(父ガリレオ)だ。この名前をご覧になつただけで、海外競馬マニアの方は「ほほう」と唸られたと思うが、この母も超一线級の競走成績を残した馬だった。デビュートしたのは2歳6月で、2戦目に勝ちあがると、次走はいきなりG2デビュータントS(芝7F)に挑み、ここを制して重賞初制覇を果たしている。

ロードデンドロンが、20年1月26日に産んだ、彼女にとっての初仔がオーギュストロダンである。

クールモアによる自家生産馬となる同馬は、今年6月1日にカラで行われたメイドン(芝7F)でデビュー。ここは、勝負どころで進路が狭くなる不利があつて2着に敗れたが、2戦目となつたネースのメイドン(芝7F)をぎっしりと制して初勝利を挙げた。

同馬の3戦目となつたのが、9月10日にレバー・ズタウンで行われたG2チャンピオンジュヴェナイルS(芝8F)で、ここは相手強化とともに1Fの距離延長が力ギとなりましたが、あっさりと克服。ゴール前で1.1/2馬身抜け出して重賞初制覇を飾った。次走は10月22日にドンカスターで行われるG1フェューチュリティS(芝8F)の予定。そこで良い競馬が出来れば、ディープインパクト産駒による英ダービー制覇が視野に入つてくるだけに、オーギュストロダンの次走には、皆様もぜひご注目いただきたい。